

第二節 沖永良部駐屯部隊

一 守備隊駐屯の経緯

日米の戦雲急を告げるに及んで、昭和十六年（一九四一）九月に、奄美要塞守備のため第六十要塞歩兵隊が、古仁屋に創設された。この部隊は、鹿児島歩兵第四十五連隊補充隊で編成された西村大尉を隊長とする歩兵四個中隊であった。

十六年十二月八日に日米が開戦し、次第に戦争が激烈になり米軍が南洋方面に迫るや、十九年（一九四四）五月に、奄美守備隊として球第三十二軍の独立混成第六十四旅団が編成された。旅団長は高田少将で、独立混成第二十一連隊長が井上大佐、同二十一連隊長が鬼塚大佐で、徳之島大和城山を中心に展開した。

十九年六月十二日、第二十一連隊の第三大隊（隊長吉

岡勝少佐）の第七中隊（隊長藤田大尉）と第八中隊（隊長清木中尉）が、沖永良部島守備隊として派遣されて和泊に駐屯し、当座は各学校に宿営した。第六十要塞歩兵隊から要塞第二十八中隊に改編され、さらに、独立混成第二十一連隊の第三大隊に編入されて、引き続き古仁屋に駐屯していた第九中隊（隊長久木留大尉）は、遅れて八月二十一日に、沖永良部守備隊に加わり、さらに大隊副官和田中尉以下百三十名が十一月四日に到着して、沖永良部守備隊はその陣容が整った。

二 高田旅団長の巡視

十九年八月十六日に、高田旅団長の沖永良部島巡視が行われ、第二十一連隊本部の有川中尉が随行した。旅団長は南洲旅館に投宿し、十七時から地方側（民間人）を招待して懇談した。これに先立って昼間、旅団長は南洲神社ならびに高千穂神社を参拝して、神のご加護による島の安全を祈願した。

十七日は、越山、大山の陣地を視察後、知名国民学校で講演し、十八時から和泊で、地方側の招待を受けて懇

談し、同夜は、沖夏（元綱夫人）宅に宿泊した。

十八日は、喜美留、国頭、西原方面を視察後、和泊国民学校で講演し、戦局を説き、町民の軍への協力に感謝した。聴衆約千人で盛会であった。同夜は池里（有川中尉宅）に泊った。

二十日は、和泊国民学校において開催された将校団の慰安会に出席され、二十一日、巡視を終えて徳之島の司令部へ帰隊した。

奄美守備隊の兵は、山口県・鳥取県で編成され、門司港を出発して八日目にやっと奄美大島に到着したので、てつきり南洋の島に來たと思ひ、ここの土人は日本語を話すに驚き、島民を軽んずる風があった。高田閣下は、島には私の叔母や親類がいるし、私よりも偉い人々が沢山輩出していると聞かせていた。今回の巡視で、沖家や池里に泊ったのも、そういう配慮があったからであろう。（註）操松と沖夏は閣下の叔母で、操垣道、有川とよ、沖元達、沖カネは従兄弟である。）

この島を愛する気持ちは終戦時にも発露した。米軍が、奄美地方を北部琉球であると主張して、沖繩と一括して処理しようとしたのに対して、閣下は、命を賭して抗弁

拒絶して、ここは鹿児島であると主張して一步も譲らなかつた。これが、奄美大島が沖縄より一足先に祖国復帰できた一因であると思われる。

三 守備隊の編制

十九年（一九四四）七月二十八日に、現地召集が行われて、守備隊の総員は六百余名になった。兵の出身地は、第七中隊は山口県六十五名、沖永良部六十五名、与論二十六名、郡内他島十名、将校下士官二十四名の計百九十九名。第八中隊は、島根県の第二十連隊で編成されたので、島根県が主力で、現地召集兵約五十名。第九中隊は、三分の一が鹿児島県、三分の二が宮崎、大分県で、現地召集兵が約三十名。この他に、機関銃隊と野砲小隊があった。また、現住民で組織する防衛隊員が約三百名いて、陣地構築などに協力した。

武器は十分な装備がなく、教門の野砲、重機関銃と、各中隊の軽機関銃、擲弾筒、歩兵銃、手榴弾などで、対戦車爆雷はダイナマイトを探してきて手製した。防衛隊は、玉城の黒瀬鍛冶屋で作った粗末な槍で装備し、槍の

に砲爆撃した後に、上陸を敢行するので、海岸や平地での砲撃は不可能なので、越山と大山に、洞窟陣地を構築することにした。

住民や防衛隊の絶大な協力によって、戦車壕・攻撃用交通壕・抗道式陣地・機関銃や野砲の掩蓋陣地・蝸壺および兵の待避洞窟などができた。（有川隊陣地図参照）作業中は、「二万五千の里人と共に築きし防禦陣、アー越山や大山の守りは堅し守備部隊」と歌って士気を鼓舞し、かつ住民に感謝した。

しかし、コンクリートを使用した堅固な陣地ではないから、敵の砲爆撃の直撃には耐えられない。二十年（一九四五）四月一日に、敵が沖縄に上陸以来の戦闘経過を見ると、玉砕を覚悟しなければならなかつた。死力を尽くして敵に大きな打撃をあたえるため、戦車爆破用の爆雷を作った。それは和泊港で座礁沈没した輸送船から引き揚げたダイナマイトを、二十センチ立方の木箱に詰め、火縄を付けたものであつた。一兵一戦車破壊の訓練をし、戦車が来襲しそうな内城入り口の三々路など数カ所に、戦車肉薄攻撃陣地も構築した。

各中隊の守備分担地域は、大体越山の東と東北方面を

訓練に励んだ。

食糧も、和泊丸沈没後は輸送が途絶して、米は底をつき、カライモ、ズイキなど現地産物だけに頼る状態であつた。

四 隊長の交替

二十年一月二十九日吉岡守備隊長が、徳之島の本隊へ打ち合わせに行くとき、母間沖で敵機の銃撃を受けて戦死したので、第九中隊長久木留国夫大尉が守備隊長となり、平中尉が第九中隊長になった。その後、五月三十日に久木留隊長が病死したので、第七中隊長藤田彦治大尉が守備隊長になり、第七中隊長には、連隊本部から有川中尉が六月二十七日付けで赴任した。

五 陣地構築

敵の上陸攻撃に対しては、上陸の際の混乱時に、水際で撃滅するのが最良である。しかしアメリカ軍は、豊富な物量にまかせて、上陸地付近を地形が変わるほど猛烈

第七中隊が、北西と西方面を第八中隊が、残りの世之主神社付近から内城入り口方面までを第九中隊（松延小隊は、大山の海軍に協力して頂上付近に布陣）が守備した。

世之主神社付近谷間に、医務室、第八中隊、第九中隊、機関銃隊、野砲隊などの待避洞窟が三十ぐらい、第七中隊の洞窟が楠谷付近に十五ぐらい構築された。

敵機の偵察に対しての射撃は禁止していた。射撃することによってわが陣地を敵に知らせることになるし、射撃すると、それに対して百倍の反撃で徹底的にやられ、住民にも危害が及ぶからである。大山の海軍基地が散々な目に会つたのがその例である。

六 医療活動

十九年六月、守備隊が上陸した当初、和泊に屋根も壁も茅で造られた部隊医務室と療養所が設置された。軍医平井中尉・桑原少尉と山元曹長以下衛生兵五名が勤務していたが、療養所は毎日たくさんの病人で多忙であつた。

主なものを取り上げると、二十年三月一日、中等学校受験生の乗った機帆船が、和泊港出帆間際に敵機の機銃

掃射を受け、二十数名の死傷者が出て、この負傷者が療養所に担送されて治療した。

軍の輸送担当の砲部隊が、徳之島から沖永良部へ食糧を運ぶ海上で機銃掃射を受けて重傷を負った兵や、和泊のウグラ浜に舟艇をつないでいて爆撃されて死傷した兵らを治療した。このころは、和泊の空襲が激しいので越山に移転していた。

敵の沖繩上陸以来、空襲の激化に伴って、各字に負傷者が続出したので、衛生兵は、なけなしの薬を持って、日夜、手当てに走り回った。

二十年四月、内喜名沖約千メートルに、友軍の航空兵が漂流していたのを、村落民の協力で五名救出して治療した。が、一名は出血多量のため戦死した。若い十八歳の通信兵であった。

この五名は輸送機の乗員で、塔載していた海軍中尉の操縦する特攻機（桜花）が敵艦に体当たりした後、グラマン戦闘機に撃墜されて海中に突っ込んだものである。この輸送機は早朝鹿屋基地を十一機と共に発進したが、敵の嚴重な防禦網を突破できず、成功したのはこの一機だけだったとのことである。

除の際、有川大尉の十五センチくらい伸ばしたアゴヒゲが珍しかったらしく、米軍将校が、写真を撮りたいが差し支えないかと承諾を求めたので驚いた。米軍は鬼畜といわれていたのに、敗者の人権を尊重して礼をつくしたからである。元来このヒゲは、戦死したときに死体が有川大尉と分かるようにと伸ばしたのに、とんだ結末になった。

この人権を尊重する米国の民主主義が、今日の日本の繁栄につながり、国民の八十パーセントが中流意識を持ち、平和な生活を楽しんでいることや、和泊町民の文化的な豊かな暮らしを見ると、あのとき玉碎せず無条件降服して良かったと、感慨無量である。

九月十六日の台風で、民家が被害を受けたので、住民への恩返し気持ちで、兵は毎日その復興と農業の作業を手伝った。

現地兵は、十月二十日に召集を解除し、部隊は輸送船の都合で、十一月三十日、小米港から引き揚げた。後には、有川大尉と兵数名が残り、残務処理して、十二月三日召集解除された。

終戦時の将校

治療手当ての助手として、女子青年衛生隊を組織し、軍医平井中尉、桑原少尉が生理衛生・伝染病・一般疾病の予防や治療法を教育し、包帯術や担架法などを指導実習させて、各中隊に配属した。隊員の熱心な学習によって相当な成績が上がった。

七 終戦

十九年十月十日の南西諸島空襲を皮切りに、二十年四月一日の沖繩上陸に伴って、空襲はいよいよ頻繁となり、敵機が空をわがもの顔に乱舞して、各地で犠牲者が続出する困難な状況になった。住民自身食料不足している中から、唐芋や野菜を供出し、農作業は夜間にして、昼間は陣地構築から薪運搬などの雑用まで必死に協力し、軍民火の玉となって島の防衛に全力を尽くした。しかし、八月十五日無惨にも敗戦に終わった。

九月二十六日、守備隊長が、各学校の御真影を越山に集めて、焼き奉ったのは誠に恐懼の極みであった。

終戦後間もなく、旅団司令部から中溝中佐が来て、米軍に武器弾薬を引き渡して海中に投棄した。その武装解

守備隊長 藤田大尉 副官 和田大尉

第七中隊長 有川大尉 第八中隊長 清木大尉

第九中隊長 平中尉 機関銃隊長 原田大尉

野砲小隊長 岩崎中尉

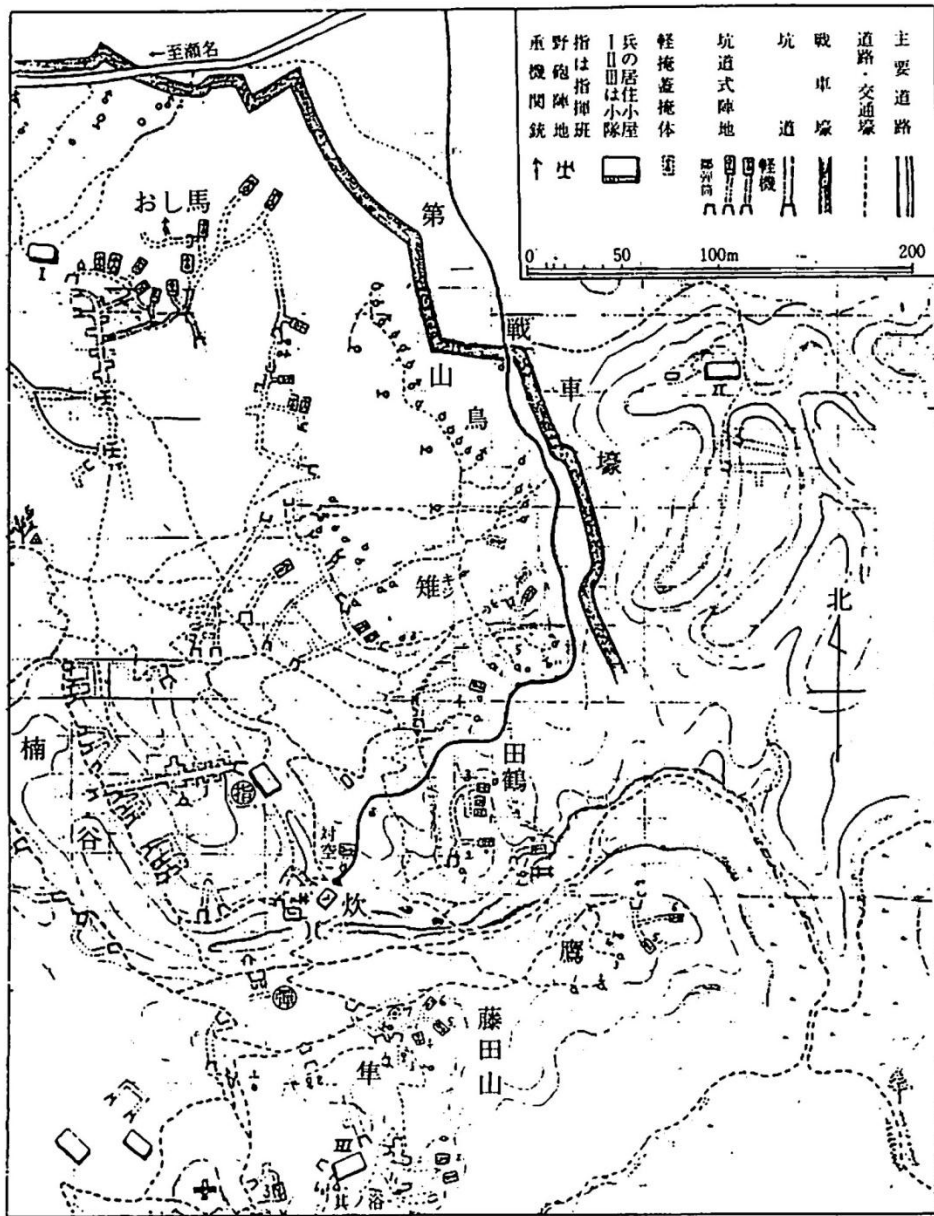
軍医 平井大尉 桑原少尉

その他の将校

河野中尉 山根中尉 浅野中尉 小野中尉

弘野中尉 藤村少尉 植村少尉 松延少尉

有川隊(第7中隊)陣地



沖永良部守備隊の歌(神武の昔) 上村義男 作詞
武田恵喜秀 作曲

行進の速さ

昭和19年8月30日よわのはまにて作曲

- 一 神武のむかし東征の
たけき心をうけついで
二 死なばもろともいつとても
明朗なれとおしえたり
この隊長をいただきて
血もて守らん沖永良部
三 二万五千の里人と
共にきづきし防禦陣
ああ越山や大山の
山河あらたに生気みつ
四 祖国の急にえらばれて
この島守るつはものぞ
うちてしやまん大和魂
よせくる敵をいさうたん
五 ゆるがぬとりで守りては
君が辺にこそ花と散れ
ああ南海の朝風に
その名かがやく守備部隊

沖永良部守備隊の歌

上村 義男 作詞
武田 恵喜秀 作曲